

家系図の好きな国，そうでない国

末廣 昭（東京大学社会科学研究所教授）

日本は「家系図」が好きな国といわれる。姓名事典の類はよく売れるそうだし、「家系図よろず屋」という商売も昔はあったそうだ。週刊誌の情報をふんだんに使った佐藤朝泰『閨閥——日本のニュー・エスタブリッシュメント——』（立風書房 1981年）などは、日本の権力構造を理解するための必読文献のひとつであろう。でも、「族譜」をもつ中国や韓国に比べると、日本の家系図好きもかすんでしまう。中国では始祖から数えて20代、30代に達する族譜も珍しくないし、李、金、朴など五つの姓が全人口の7割を超える韓国では、1000ページを超える族譜もあると聞く。

仏教国のタイも、家系図好きでは東アジア諸国に負けていない。アユタヤー朝後期から現在に続く名門ブンナーク家（アラビア人系貴族）など、家系図のみでびっしり120ページ、主要人物の紹介の付録も470ページに及ぶ大部の本である。1860年代にタイに移住し、その後、精米、コメ輸出、海運、保険、銀行業で一大財閥を形成したワンリー家（陳姓、潮州系、饗利行）の5代にわたる家系図を、わたしは『葬式本』（葬式時に頒布される故人の履歴やゆかりの話を取録した冊子）や聞き取り調査をもとに苦労して完成させ、悦に入っていたことがある。ところが、香港科学技術大学の蔡さんが、中国側の史料を使って同じワンリー家（陳姓、乾泰隆行で知られる）を調査していることを知り、タイでの創始者がじつは中国では19代目にあたることを知らされた。後日送られてきた250ページに及ぶ陳家の詳細な「族譜」を手にして、中国の祖先（父祖）崇拜のすごさに打ちのめされたことがある。

中国の家系図とタイの家系図の大きな違いは、父系制の中国では男性、もしくは男性と娘婿の名前しか記録しないのに対して、タイでは男性も女性（妻方や娘の家族）もその系譜がしっかりと残されている点である。場合によっては、仏教に固有のルーク・ブンタム（徳を積むための養子）の名前も登場する。したがって、数多く残されている葬式本や華語新聞の慶弔に関する広告を丹念に収集すると、タイのファミリービジネスの所有や経営の人的結合を解明することは、それほど困難な作業ではない。

ところで、アジア経済研究所では、星野妙子氏を主査にして「ラテンアメリカと東アジアのファミリービジネス」に関する比較研究を続けており、わたしもこの研究会に参加している。研究会の報告を聞いていると、どうもラテンアメリカ・チームは、主要グループの家系図の作成に苦労しているようだ。お国柄の違いか、家族・相続制度の違いか、はたまた「イエ」概念の違いか。それとも頻発する富裕層の誘拐事件に対する自己防衛のなせるわざか。ファミリービジネスの所有と支配のパターンの違いを、両地域の経済政策、法的制度、産業構造の違いからだけではなく、ファミリービジネスが置かれている政治環境や社会文化の違いから検討してみるのも、価値のある作業であろう。

そういえば、タイでも軍が華人系財閥を目の敵にしていた時代には、各家族の家系図は「門外不出」であったし、華人グループは、冷戦時代には「赤い中国」との血縁的地縁のつながりを極力隠すのが普通であった。華人系財閥が自分の家族の歴史をマスメディアに公表するようになるのは、タイでも1980年代に入ってからのことである。家系図の有無や作り方の違いから、両地域のファミリービジネスの違いを解明するのも、比較研究のテーマに十分なりえる。いずれにせよ、タイ財閥の所有主家族に関する完璧な家系図をラテンアメリカ・チームに「どうだ！」と提示するとき、我が家のことではないのに、つい誇らしくなってしまう。これも共同研究の楽しみのひとつである。